

痴れ者よ

第一回「還ってみれば此は如何に」

市川司幸

第一百七十五条

猥褻ノ文書、凶画其他ノ物ヲ頒布若シクハ  
販売シ又ハ公然之ヲ陳列シタル者ハ五百  
円以下ノ罰金又ハ科料ニ処ス。販売ノ目的  
ヲ以テ之ヲ所持シタル者亦同ジ。

(昭和十六年改正 猥褻物頒布等の罪)

一九四五年十月六日、日本海。釜山発・舞鶴行き引揚船「栄光丸」は、年老いてガタの来ている体でのっしりのっしりと這うように、航行を続けていた。

波は比較的穏やかだが、灰色の雲が空を覆っている。太陽は見えない。冬の到来を控えた肌寒い風が甲板を走っていた。

それにも関わらず、甲板にはカーキ色の軍用外套を羽織った日本軍の兵士たちがわらわらと群がっていた。中には大陸で外套を無くしたり、金策のために売り払ったりした者もいて、彼らは集団のなるべく中心のほうに潜り込んで寒さをしのいでいた。しかし、汗臭い。

彼らが寒さをこらえてまで甲板に出ていようとする理由は、至って単純である。船内においてもやることがないのだ。

船内において、兵士ひとりひとりに与えられた空間は、「蚕棚」と呼ばれる寢床だけだった。

蚕棚、というのは養蚕の用語である。木の枠に竹竿を十本ほど挿した棚のことで、そこに「えびら」という蚕を飼育する籠を

設置する。狭い農民の家でなるべく多くの蚕を育てられるよう、段と段の間はきわめて狭小に設計されている。

引揚船の寝床も、空間が狭い。うっかり頭を持ち上げれば、すぐに上段にぶつかってしまふ。多くの引揚兵を効率よく輸送するための構造だったが、旧日本兵はこの窮屈な寝台を「蚕棚」と呼んでいたのである。この船の中では、誰もが皆人間ではなく虫になってしまふ。

そんな窮屈な空間に体を横たえて、薄く汗臭い煎餅布団を被っているよりは、多少寒くても甲板に出て、様々な形に変容する雲を眺めていたり、時折現れる海鳥が船のずっと先を飛んで行くのを眺めていたりするほうが、何倍も楽しいのだった。

しかし兵士たちの中には賢い者もいる。長い無聊を予測して、引揚船に乗る前に暇つぶしの玩具を拵えてきたのである。

たとえばある兵士は、釜山港の売店でサイコロを買って、船内で丁半博奕を楽しんでいた。船内で時折配給される大豆十数粒を賭けて、「張った張った」とやるのであ

る。

またある者は、戦場で拾った動物の骨や角を削って作った麻雀牌で遊んでいた。麻雀牌の製作は組織的なものだった。同じ部隊に属している兵士が数個ずつ持参して、計百三十六個。船内の狭い廊下に胡坐をかいて興じている。

その他にも、古新聞を何重にも重ねて作ったメンコで戦ったり、軍の手帖に詩歌を書いたりして、時間を潰しているのだった。しかしそういった慰みの手段を得ている者が、栄光丸にどれほどいただろうか。おそらく半分にも満たないだろう。残りの引揚兵は、やはり甲板に出るか、仕方なく蚕棚で昼寝をして過ごしているしかなかつた。

元衛生兵の山崎耕作は蚕棚で一日を過ごす元兵士のひとりだった。通路に背を向けて横たわっている。だが、寝むっているわけではない。

手に一冊の雑誌が握られている。古い雑誌で、ページは黄ばみ、中身はあやうく落丁しかけている。日に焼けた手で慎重にペ

ージを繰りながら、男は雑誌の一字一文字を丁寧にとって読んでいた。

会社員が電車の中で本を読んでいるのは雰囲気が違う。食い入るように、という助動詞が似合う読み方である。目と活字の距離は、近い。蚕棚が窮屈なだけになおさらである。

雑誌の中身は、性的かつ暴力的である。豊満な裸体の女性が体をくねらせている写真。西洋の金髪美女。拷問を受ける女の凶。不倫実録。毒婦伝。射殺された兵士の四肢が転がる戦場の写真。四十八手の指南。

猟奇的で凄惨でエロティックな写真や絵が、整っているが時々酔ったように饒舌になる文章とともに載っていた。

山崎が狭い蚕棚で雑誌を読んでいるのは、この雑誌の内容が原因だった。

もし他の日本兵が雑誌を目にしたら、すぐに彼らはそれをひったくって、まるで無数の蟻が一個の角砂糖に群がるように奪い合うに違いない。

エロとグロは、戦争で疲弊しきった男た

ちにとつて何よりも栄養価の高いものだった。凄惨な戦場で感覚が麻痺した彼らは、生半可な刺激では満足がいかない。濃厚なエロとグロは汁の滴る肉であり、脂の乗った魚であった。

たとえ性的欲求や猟奇的衝動に囚われていなくとも、雑誌の放つ香気は元兵士たちの心を慰めた。

大陸に出兵した兵士たちの多くは、内地に家族を残し、単身で武器を担いできた。長らく妻子の顔を見ていない兵士、手紙かわらずかに家族の温もりを感じている兵士、その手紙がついに届かなくなった兵士。キリスト教徒の中には、生みの親を知らないために聖母子像に母の愛を感じるという者がいるらしいが、豊満な女体の絵に安らぎを覚える元兵士も、母なき信者と違はないだろう。

しかし、山崎耕作の雑誌の読み方は、こうした兵士たちの誰にも見られないものだった。エロ・グロに欲情しているわけでも、母なるものを求めているわけでもない。その目には、畏敬のようなものがあつた。

彼の「目」について理解するためには、まず山崎耕作という一兵士が栄光丸に乗り込むまでの経緯について語らねばならない。

一九一三年、東京浅草生まれである。

父が映画館勤務で、一人息子の耕作をよく楽屋に連れてきては、フィルムや機械に触らせていた。耕作の少年時代は、ちょうど映画の形態がサイレントからトーキーに移る時期と重なる。放課後になると耕作は他の子どもと街を走り回ることはずに、この映画館の隅で外国の映画を立ち見して過ごしていた。

彼が大学卒業後に劇場で働くようになったのも、この少年時代の影響であろう。父親のついで有楽町の劇場に就職し、スタッフとして働いた。しかし山崎はここで仕事を楽しいとは思わなかった。劇場で働いているからといって、舞台の上で繰り広げられる物語を見る事ができるとは限らないからである。

(演者の衣装を替えたり、照明を動かしたり、客の券を切ったりするばかりじゃないか)

山崎はそう思いながら、日々の作業をこなしていたが、結局彼は徴兵されるまでの職場を離れることがなかった。劇場を離れて他の場所で働く自分が想像できなかったし、今さら他の仕事に就いたところで、その仕事に面白みを感じられるとは思えなかったからである。一種「諦め」の念であろう。

一九四二年。山崎耕作二十九歳のとき、彼は召集令状を受けて中国に派兵された。戦闘員ではなく衛生兵としてであった。

山崎は筋力がない。徴兵検査を受けた際、周囲の男たちが重さ十貫の砂袋を十回二十回と持ち上げていく中、山崎はたったの一回しか持ち上げることができなかった。病気はなかったから、結果は第二乙種。武器を運ぶのではなく、薬箱を運ぶ役割になった。

山崎が配属されたのは上海の病院だった。深夜の勤務で、薬品の管理や備品の管

理を任されていたが、次第に昼も夜も関係なく働かされるようになった。

折しも大陸の戦線は難航しており、あちこちから運ばれてくる傷病兵の数は増加の一途を辿っていた。それに加え、燃料不足などにより本土から物資を運んでくる輸送船の数が減少していることもあり、病院の薬品類は不足状態に陥っていた。病院の衛生兵たちは、代替の薬品や包帯を調達するために使い走りに出されることが増えていった。

下っ端の山崎は決まって最初に買い出しを命じられた。働き盛りの年齢ということもあったし、背丈が前線の兵士と同じくらいだったために力があると思われるのである。しかし実際のところ、山崎は病院の誰よりも非力である。

深夜番を終え、ようやく睡眠をとろうとしているところに上官がやってきて「山崎。至急、包帯のための布を調達するように」

と命令され、金を与えられて使い走りにやられたことを、後年山崎は酒の席でよく

話した。

「今でも疲れ果てて布団に入ろうとする、あの岩のような上官の顔が枕元に現れて、すぐに出かけて来いと脅してくるのさ。まったくたまらないよ」

山崎にとつて、この時の経験は忘れられぬほど苦しいものだったようである。

しかし、「住めば都」という言葉があるように、人間というのはどんな環境でも案外順応できる生物なのかもしれない。

山崎は生活のリズムを深夜に合わせ、それから仕事の段取りや安く売ってくれる薬種商を頭に叩き込むことでこの労働に対応した。あとはひたすら手足を動かさし、しばしば飛んでくる上官の叱咤や暴力に黙って耐えるだけである。ここでも山崎の「諦め」の念が働いていた。一人間としての欲望や矜持を諦め、そしてこの状況から脱することを諦めてしまえば、案外苦痛を感じなくなることを山崎は知ったのである。まさに「機械的に働く」ということである。

しかしいくら機械のように働いている

とはいえ、完全に機械になりきることはできない。

一九四五年の三月の暮れのこと。山崎は埼玉に住む親戚から送られた電報で、両親の死を知った。ちょうど深夜番が終わり、部屋に戻ろうとしたときだった。電報を読んだ山崎は、部屋に戻るなり頭から布団を被り、声を上げて泣いた。

この年の三月十日、「ミーティングハウス二号作戦」と呼ばれた東京一帯への大規模な空襲が行なわれた。山崎の実家があつた浅草地区は、深夜に爆撃を受けてほとんど壊滅状態となった。山崎の父母は寝ているところを炎に囲まれ、逃げる間もなかったのである。

「アサクサクウシュウ チチハハシス キヲオトスナ」

出征の日に最後に見た親の姿が幻燈のように脳裏に映し出された。

汽車の出る駅は他の兵士を見送る家族でごった返すだろうということで、両親はひとり息子を玄関で見送ることにしたのだった。

厳格な父親は、腕を組み仁王立ちになつて、

「御国のために頑張るんだよ、犬死をするんじゃないよ」

と息子に縋り付く妻の姿を黙って見ていた。普段から口数の少なく、感情を滅多に表にしない父親が、別れのときにもその姿勢を崩さなかったことに、山崎は誇らしさを感じた。

しかしこれが今生の別れになろうとは。しかも、自分ではなく両親の死によつて。

山崎は声を殺そうと努めたが、それでもやはり嗚咽が漏れた。今日は上官に頼み込んで、一日中悲しみに暮れていたと切に願った。だがその願いは、すぐに泡と消えた。

「山崎、至急市場に出て包帯に使用する布を調達してくるように」

上官が乱暴に扉を開けて入って来た。布団を被っている山崎を発見すると、それを剥いだ。

「貴様、何を泣いている。すぐに買い出しに出かけろ」

山崎は弱った犬のような目で上官を見上げた。

「申し訳ありません、少し腹の具合が悪く、この通り身動きのとれない状態であります。今度の買い出しは、他の者をお願いいたします」

山崎の頬に張り手が飛んだ。

「何が『腹具合が悪い』だ。日頃の体調管理が杜撰なせいで下痢にでもなったのだろう。下の階にいる軍人たちを見てみろ。

中には腕を飛ばされている者もいるが、皆泣き言ひとつこぼさずにいる。それに比べて貴様は、ちゃんな腹痛ごときで泣き言をほざきやがる。貴様がそうやっている間に、我が大日本帝国を支える戦力が減っていくのだ。そして我が国の戦況は悪化する。

数多の勇士が血と汗とで切り開いた土地が、その軟弱な精神のせいで失われるのだ。そのことを知ったうえで、貴様は弱音を吐いているんだらうな？」

上官は早くも二発目の拳を固めていた。自分の怒号に酔っているようなところがあった、ますます怒りが増していくのだっ

た。

山崎は心の中で大きなため息をついた。ほんとうは不条理な上官の叱責に震えるような怒りを覚えていたが、ここで歯向かったところでどうにもならないことを山崎は痛いほど知っていた。ため息は山崎にとって、何かを諦めるための儀式のようなものだった。ため息をつけば自分の中の怒りとか悲しみとかが最早どうでもよくなつた。

山崎は鉄拳を食らうまえに上官からわずかばかりの金を受け取ると、急ぎ足で病院を出て行った。とめどなくあふれていた涙はすっかり乾いて、そのあとを早朝の上海街区の空気が触れてひんやりと冷たかつた。

まだ七時にもなっていないというのに、市場は賑わっていた。

ふだんは人通りの少ない深夜に買い出しに行くので、山崎は早朝の市場が新鮮だった。時刻は早いのに人の往来が激しい。出ている店の種類にもいくらか違いがあるようだった。

深夜には小腹をすかせた人間のための安い総菜屋や酒屋、売春宿などが明かりを点けているが、朝になると野菜や魚などの生鮮食品を売る店が増えていた。ついさっき収穫・水揚げされたばかりのものである。朝飯を売る店もある。

山崎は上海に配属されて、もう三年近くにもなる。中国語を勉強しようとしたことはなかったが、三年もいると自然と身に着いた。朝の白くまぶしい太陽を浴びながら、汗を流して客を呼び込む商人たちの巧みな話術に感心しながら、通りを歩いていく。こうした呼び込みの声も、深夜の買い出しでは見ることでできないものだった。

山崎は普段訪れている薬種商のもとへ向かった。

店主は老婆である。未亡人で、夫は三年前に辛亥革命の混乱のなかで殺された。夫の死後、彼の実家の店を継いで、今に至る。

山崎は、安く医薬品や包帯を売ってくれこの店を最賃にしており、何度も利用していた。店主のほうも、何度も深夜に使い

走りにやられる、ひ弱そうな日本人を氣遣って、いくらか値段を割り引いてくれた。た。

しかし、この日山崎が店を訪れると、開いていなかった。考えてみれば、山崎がいつも店に来るのは深夜であった。今は早朝である。営業時間を過ぎてしまっていた。

仕方なく他の店を探した。しかしいくら歩き回っても、こんな朝早くに営業している薬屋は見つからなかった。まさに、不覚とや言うべきことである。

病院を出たばかりのときはまだ薄明の中にあった上海は、気が付くとすっかり明るくなって、時刻は八時をとうに過ぎていた。

このまま市場を歩き回って時間を無駄に食いつぶせば、上官は自分を打擲するだろうし。かといって「包帯はありませんでした」と渡された金を返す、なんてことをすれば、さらに強力な殴打を食らうことは間違いない。それだけは、避けたい。

そこで山崎は、たまたま近くにいた古着を扱う露天商に声をかけ、

「この屋台でもっとも白く新しい布を、細長く切って売ってくれ」

と頼み込んだ。

中年の露天商は難儀そうに荷物を探り、彼の中で「もっとも白く新しい布」であるという、手ぬぐいのようなものを切って山崎に渡した。布はどうみても古いものだった。薄汚れて黄ばみがある。お世辞にも新品の包帯とは言えなかったが、息絶え絶えの演技で上官にこの布を見せ、斯く斯くしかじかでこの布を手に入れたという苦勞を訴えれば、鉄拳制裁からは免れずとも、情状酌量にはなるだろうと考えた。

山崎は金を払い、急いで病院へと急いだ。病院までは遠かった。

突然強烈な倦怠感に襲われて、山崎はその場に座り込んだ。汗がだらだらと滴っている。息切れがして、喉も乾いていた。そういえば、と山崎は自分が夜勤から一度も休憩をとっていないことを思い出した。そこに両親の訃報、そして何時間にも及ぶ上海市場の彷徨が、巨大な疲勞として山崎にのしかかってきたのである。

目の前に古本屋があった。

ちようど店を開けようとしているところだった。山崎は本能的に店主らしき男に飛びついて、

「水を、水を一杯くれ」

と言った。

店主は小柄な老人である。身長だけなら、そこらを駆けまわっている子どもと変わらないだろう。店主は突然背の高い日本人がやってきたことに驚いたが、たどたどしい中国語で水を求めていることを知ると、すぐに湯のみ一杯分の水を汲んできた。それを山崎は一息に飲みほした。幾らか体に生気が戻ってきたように感じる。

老店主は山崎を店の奥に入れた。こじんまりとした店内いっぱいには本棚が配置され、実に様々な本が並んでいる。

山崎は休憩がてら、少し店を物色してみようと思った。

(もう時間は経ってしまったているんだ。ここで休憩していてもいかななくても、殴打の数は変わらないさ)

棚を探してみると『新青年』や、巴金(ば

きん)、曹禺(そうぐう)の古本などが見つかった。中国人でない山崎も知っている名の知れた本だった。

また、山崎の意外だったのは日本の書籍が多いことだった。上海は日本に接収されていたから、考えてみれば日本の書籍があるのは自然なことのはずだったが、こういう古書店にも日本の本が置かれているのは山崎の知らないことだった。

「こういう本は売れるのか」

山崎が尋ねると、老店主はキセルを吹かしながら

「ああ、売れるよ。あんたたち日本の兵隊が買っていくんだ」

と言った。だみ声である。

ふと山崎は平積みになっている雑誌が目についた。

裏返しにされているが、裏表紙の広告は日本語である。薄い雑誌だ。

表紙には大きく、「ばらいそ」の文字。

その下には、

——悔り難き変態雑誌、堂々の復活

という文句があった。

山崎は、雑誌のページをめくってみた。驚いた。性的興奮を誘うような文章や絵がひしめいていたからである。

海外小説の翻訳なども載っていたが、果たして原文をそのまま訳したものなのかと疑いたくなるほど、姦通や嗜虐趣味が盛り込まれている。もしこの内容を世に出さうとすれば、必ず当局からの検閲に引っかかるに違いない。出版元は治安維持法に違反したとして潰されるだろう。山崎は劇場で働いていたため、こうした表現が規制の対象であることは痛いほどわかっている。

しかし、何かが違う。ただどぎついものを出せばいい、という自暴自棄な雰囲気がこの雑誌にはない。文章のあちこちに読者の心をくすぐるような言い回しや、エロ雑誌とは思えない知的な言葉の使い方がされている。そうした文章のおかげか、この雑誌は何か高尚なものにさえ感じられる。(妙なエロ雑誌だな。しかし、こんな日本の雑誌がどうして上海にあるのだろうか)

山崎は店の奥で帳簿を繰っている老店

主に尋ねた。

「この雑誌は誰が持って来たんですか」

店主は山崎から雑誌を受け取ると、しばらくとめくった。近視のようで、ページと顔の距離が近い。

「これは、十年以上前だね。ある男がリヤカーいっぱいこいつを運んできたんだ。これはその中の一冊だ」

「その男は日本人？」

「たぶんそうだね。中国語を話してはいたが、たどたどしくて発音も変だったから、日本人か朝鮮人だと思っていたが、雑誌が日本語だから日本人だったんだろうな。背広を着た紳士のような男でね、眼鏡をかけていたな。そんな男がこんなのを持って来たから驚いたんだ。彼は『ぜんぶ買い取ってくれ』と言った。ただ内容が内容だったから、安い値段になるよ、と言ったら『それでもかまわない』と、『どんな値段でもいい。金のことはどうでもいい。今日中にこれ、何とかしないと、自分、警察に捕まる』。わしはどういう意味かわからなかったが、きっとこの本が日本にとっては都合

が悪かったんだろうね。とりあえず半年は店の奥に隠しておいて、少しづつ少しづつ、店に出していったのさ。あんた、これを買うのかい」

「買うかもしれません」

「買うんだったら気を付けな。あんたも捕まっちゃうかもしれないよ」

店主はひっひっひつひつと引き笑いをし、それから口いっぱい煙草のけむりを含んで、天井に向かって吐き出した。

(やはりこの雑誌は当局に睨まれていたらしい。これを持ち込んだ男は、出版社の人間か何かで、雑誌が摘発されて自らも捕まることを恐れて、普通の書店ではなくこのさびれた古書店に品物を流したのでろう)

「しかしその雑誌ね」

店主は煙草の種をキセルに詰めながら「案外売れるんだよ。しかも日本の軍人たちが買っていくんだ。店を開けたばかりの時間とか、もう店を閉めようって頃にやって来て、この雑誌を買うとそそくさと帰っていくんだ。普段はあれだけ威張ってる日

本の軍人がだよ、鼠みたいに小さくなって逃げていくもんだから、見ているこっちはおかしくてしょうがない。

そんなこんなで、もうあんたが持っている一冊が、あの男が持って来た中の最後のやつだ」

山崎は悩んだ。この雑誌を買うか否かということで。

雑誌の値段が悩みのもとなのではない。値段は、市場で売っている饅頭の値段と同じか、それより安いぐらいである。

問題は、この本を持っていることで自分の身が危うくなるのではないかということである。山崎の働く病院は、こうした卑猥な書物を嫌う軍人たちの巢窟である。ふとした瞬間にこの本の存在がばれてもおかしくない。それに、病院では不定期に手荷物検査が行われ、あやしい物を隠しているとすぐに没収・折檻される。

『ばらいそ』は、間違いなく危険な雑誌だった。それを所有するということは、山崎自身にも危険が及ぶ可能性がある、ということを意味していた。



(たしかにこの雑誌は、普通のエロ雑誌にはない妙な魅力がある。だが、この程度の工夫がある雑誌なんて、俺が知らないだけで、世の中にはごまんとあるのではないか？ そんな雑誌のせいで、自分の身を危険にさらすなんて馬鹿げている)

山崎はそんなことを考えながら、再び雑誌の前身に目を通し始めた。

すると、めくったページとページの間から、ぼろつと紙片が落ちた。ページが落丁したのではないかと思い、拾ってみると、どうやらページではなく何かのチラシのようであった。裏面は白紙で、ページ番号もなかった。

紙片には、このような文章が書いてある。

『ばらいそ第三號』死亡御通知

豚児『ばらいそ第三號』はサンザン母親に産みの苦しみを味はせ、漸く誕生致し甲斐も無く、急性発禁症候群の爲め、昭和三年十二月廿日を以て、長兄『ばらいそ第二號』の後を追ひ永眠仕り候。「夭折する子は美しい。」とは子を亡くした親の嘆きと

は存じ候へども、お察し被下度候(くだされたくそうろう)。生前御愛顧を蒙りし諸君の御期待に背きし段は何んとも残念の至り、豚児も柩の中より、口惜し涙にむせび泣いて居る事と存ぜられ候。遺骸の儀は好都合にも、帝都三田署に於て一年間安置の上、茶毘に付して呉れる事に相成り居り候へば、こればかりはせめてもの光榮と存じ居り候。猶遺言にヨリ、供花焼香の類は一切御断り申上げ候共、第四子『ばらいそ第四號』出産の場合は誕生祝として賑々しく御聲援被下様願上置候(くださるようねがいあげおきそうろう)。

一九二八年十二月の暗く暖き夜

東京三田

喪主 ばらいそ社代表 南原梅雨

親戚総代 文藝興行社

内容を要約してみると、以下のようになる。

『ばらいそ第三號』は昭和三年十二月二十日に、前の第二號と同様に発禁処分になりました。読者にはたいへん残念なことに

なりました。雑誌は東京三田署で一年間保管されたあと、焼却処分されます。第四號が出版された場合はぜひお買い求めください」

山崎が雑誌の表紙を見返してみると、題字の下に小さく「第三號」とある。つまり、この紙片で「急性発禁症候群」になったと書かれているのが、この雑誌なのだ。

山崎は前号が発禁処分になったにも関わらず懲りずに三號を出版していることにも驚いたが、それ以上に、奇妙なことに気付いた。

(どうして第三號の発禁通知書が、発禁になり没収されたはずの第三號に挟み込まれているんだ?)

山崎はひとつの仮説を立てた。

この雑誌は昭和三年(一九二八)に発行され、紙片の通り発禁処分・没収の憂き目を見た。紙片はその直後に、第三號を待ち望んでいた読者に向けて印刷されたものなのだろう。しかし出版社の人間はしたたかにも第三號を隠しもっており、ひそかにそれを売ろうと画策していた。そして社員

のひとり第三號を持って上海に渡り、警察の目を逃れて販売を試みたが、あえなく勘づかれてしまった。そして彼は物品を処分するために古書店に第三號を安価で売りさばいたのだ。

何のために？

ひとつは、警察を挑発するために。もうひとつは、これは山崎の憶測だが、自分たちがこの仕事に込めた熱量が並々ならぬものであることを、読者に知らしめるために。

紙片から、こんな声が聞こえて来る。

「我々の雑誌はたしかに摘発を受けたが、それごときに屈するほど我々の変態精神は軟なものではない。たとえ何度摘発され、ついには牢の鎖に繋がれようとも、我々はエロ・グロの精神を発信し続けよう」

今まで意識もしていなかった、店の外の喧騒が突然山崎の耳に飛び込んできた。市場が鼓動している。

（俺は、上官の命令に怯え、一日に受ける暴力の数をかぞえながら日々を生きてきた。そんな毎日に慣れていたし、変えた

いとも思わなくなっていた。それに比べてこの雑誌を出版した人間たちは、摘発を気にもしないでひたすらに自分たちのやりたいことをやってみせた。そして、自分たちを弾圧する社会そのものにも果敢に挑戦してみせた。彼らに比べ、俺の何とちっぽけなことか）

胸に立ちこめた瘴気が、晴れた。もう、迷いはない。

「この雑誌、買います」

山崎は店主の前に金を置いた。

老店主は金を受け取ると、「せいぜい捕まんないように」と言った。

「警察に捕まるくらい、何もこわくありません」

山崎はそう言うと、店をあとにした。

すっかり太陽が天高くに昇って、上海市場はいっそうの人のいきれであった。人ごみをかき分けながら、山崎は急いで病院へと向かった。手には買ったばかりの『ばらいそ第三號』があった。

病院で、真つ先に山崎は殴られた。上官の拳が二発ぼかっぼかっつと飛んだ。一発目

は、病院に帰って来るまで時間がかなり過ぎていたことへの罰、二発目は、あれだけ時間をかけて買ってきたものが薄汚れた布切れだったことへの罰である。

しかし、山崎は弁解をしなかった。黙って殴られた。

それだけではない。殴られたあとで、きつと上官を睨んでみせた。普段は命令に対してぺこぺこ頭を下げてばかりいる、ひ弱な山崎が初めて反抗の意志を見せたので、上官はたじろぎ、大声で叫ぶつもりだった説教の文句を忘れた。

それからというもの、病院での生活で『ばらいそ』はささやかな楽しみとなった。山崎は雑誌を布で包み、自分の背囊のいちばん上に仕舞っていた。読むときは同僚に見つからないよう、服の中に隠して便所に持って行った。

ただ、山崎にとって『ばらいそ』は性的欲求を満たすものというよりは、思想書のようなものだったことは、書いておかなければならない。

戦争というものは、日常とは百八十度異

なる特殊な状況である。人を殺し、そして殺される、ということが頻繁に起こるだけでなく、任務遂行のために物資を節約し欲望を抑えることが求められる。

人間は、元来平穏と欲求の満足を求める動物である。そんな人間が、短期間の戦闘ならまだしも、長期間に及ぶ近代的な消耗戦に耐えるためには相当な精神力が必要となる。

そんな中で利用されたのが「思想」であった。

大東亜戦争と称される、この未曾有の大規模戦争で活躍した「思想」の最たるものは『葉隠』である。鍋島藩士の山本常朝によって正徳年間に書かれたこの思想書は、天皇礼賛思想蔓延るの戦時中において、士気高揚の手段として用いられた。

「武士道と云ふは死ぬ事と見つけたり」

これは『葉隠』屈指の名文だが、本来この一文は、決死の覚悟で向き合うことで武士の責務を全うできる、ということの意味しているのだが、次第に人々は「死ぬことこそが素晴らしい」という意味に誤解して

いき、軍部はその誤解を利用した。つまり、「武士は死ぬことが誉れ」という誤った認識を兵士たちに植え付けることで、死への恐怖感を消そうと考えたのである。著者の山本常朝からすれば迷惑極まりないことだろうが、結果から見れば兵士たちの多くは『葉隠』の思想のもと戦場に飛び出し、そして「武士らしく」命を落とした。その最たるものが特攻である。

山崎にとつての「思想」は、『葉隠』ではなく『ばらいそ』であった。とりわけ彼が感銘を受けたのは、第三號に挟まっていたあの「死亡御通知」であった。

権力にただ従うのではなく、時に反抗するのも重要であること。厳しい状況下でこそ、それを笑いにできる余裕が必要であること。そして、自分の仕事を貫き通すためには勇氣と遊び心が求められること。

山崎はあの紙片から、このような思想を得た。

ただ、思想を得ただけですぐさまその思想通りに行動を変えることができないほど、人間はうまくできていない。山崎

は思想を見出したあとも依然として小間使いのように働かされたし、不条理な上官の命令に歯向かうことは終ぞなかった。しかし、間違いなくこのことが彼の人生に大きな影響を与えた。彼はせわしなく院内を駆けまわりながら、考えた。

（上官に歯向かったり反撃したりするのは、不可能かもしれない。しかし心の中で反抗するのはいくらでもできることだ。反抗の心を忘れてはならない）

もちろん『ばらいそ』は思想書ではない。人間について説くような高尚な文章はひとつも見当たらないし、書かれているのはエロとグロだけである。そこに思想を見出したというところに、山崎耕作という男の特異性がある。彼は常人が目にも留めないようなところに興味を持つ、という性格をもっていた。そしてこの性格が、その後の彼の人生を奇ッ怪な方向に運んでいくことになるのだが、それについて書くにはまだ早い。

いや、ひとつだけ書いておこう。

山崎は何度も『ばらいそ』に目を通して

いるうちに、あるひとりの名前が気になった。

「南原梅雨」

雑誌の裏表紙に小さな文字で書かれていた出版者の名前である。つまりは、この雑誌を出版するうえで責任者、ということになる。この男のもとで『ばらいそ』は企画され、形になり、頒布されたのだと考えていい。

また「南原梅雨」という名前は、雑誌の裏表紙だけでなく「死亡御通知」にもあった。「ばらいそ社代表」そして「喪主」を名乗っている。

発禁処分になっても尚当局に喧嘩を売るような雑誌を創り上げ、そして自らもペンを執って挑発文をしたためる、この奇妙な出版人に山崎は興味を持った。

(いったいどんな男なのだろう。一度会ってみたいが、この雑誌が発行されてから既に十七年が過ぎてている。果たして生きているかどうか)

山崎は時間のあるときに、病院の同僚や患者に『ばらいそ』や「ナンバラバイウ」

について尋ねてまわった。すると意外なことに、『ばらいそ』を知っている者が何人かいた。

砲弾で右足を吹き飛ばされた患者は、山崎から『ばらいそ』の表紙を見せられると、懐かしそうに顔をほころばせた。

「昭和一桁の頃は東京のあちこちに珍書屋があつてさ、おれは学生時代によく通ってたんだが、そこに売っていたのをよく覚えてるよ。巷の雑誌じゃ満足できないやつとか、公に売れない外国の小説が欲しいやつらはそこに行つてたのさ。外国の本はお上が嫌がるのよ」

「ここに書いてある、南原梅雨という方はご存知ですか？」

山崎が裏表紙の文字を指し示す。

「ナンバラバイウ？ 知らないね。おれたちが気になつていたのは雑誌の中身で、誰が書いたとか、どこの出版社が出していたとかは気にしたことがなかったなあ」

結局、彼は上海で南原梅雨という人物についての手掛かりを得ることはできなかった。

一九四五年七月、山崎は上海から朝鮮の釜山に配置換えとなった。

移動は船であった。船内はすし詰め状態でほとんど身動きがとれず、その混雑をねらった掏摸が横行した。山崎は『ばらいそ』を背囊から出して、我が子のように胸に抱えた。背囊の中身は盗まれても、これだけは離さないという心のあらわれであった。

山崎は釜山の病院で引き続き雑用として働いたが、院内の待遇は上海のそれに比べれば幾分かましであった。上官はむやみに暴力を振るうことがなく、休みなしの買い出しもなかった。既に戦局は日本敗北に傾いており、物資は極端に不足していた。無い物を買に行かせても、ということであろう。

大東亜戦争が終結したのは、釜山転勤から間もない八月十五日のことであった。しかし、病院にそれが伝えられたのは十七日のことだった。山崎は他の医師や衛生兵と同様に、待合で院長の口から敗戦を伝えられた。誰もがしゃくりあげるように泣いた。待合そのものが慟哭しているようであった。

た。

その中で山崎がただひとり、平然として  
いる。

(あれだけ薬品や包帯がない、ないと喘  
いでいたくせに、それでも日本が勝てる  
信じていたのか。毎日毎日負傷兵が運ば  
れてくるというのに、それでも戦局が有利  
であると信じていたというのか。院内には  
敗戦の雰囲気は濃く漂っていたじゃないか。

それにも関わらず誰もそれを感じるこ  
とができなかったというのは、結局病院の  
人間たちは何も考えずに機械のように動  
いていただけだということなんだろう)

山崎は、たったひとりで醒めていた。

敗戦から間もなく、大陸の兵士を本土に  
送る引揚船の情報が入って来た。入って来  
たと言っても公式に発表された情報では  
なく、あくまでも階級の高い一部の兵士  
の間で噂されていたことを山崎が盗み聞き  
したに過ぎない。

幸いにも引揚船は山崎のいる釜山にも  
来る、とのことで、山崎はひそかに情報を  
集めて乗船の機会をうかがっていた。

十月一日に到着した引揚船第一号「富嶽  
丸」への乗船は叶わなかった。乗ることが  
できたのはほんの一握りの将校のみで、山  
崎のような衛生兵は受付すら叶わなかつ  
た。

しかし、翌日に到着した「栄光丸」は、  
先着で一般兵士の乗船も認めるとのこと  
で、山崎は真つ先に受付を済ませて切符を  
手に入れることができた。

出航の日、山崎は港の検疫所で検査を受  
けた。当時最も恐れられていたのは伝染病  
のコレラで、特に入念な検査が行われた。  
コレラの罹患が発覚すると切符はその場  
で紙くずになる。山崎の三人前に並んで  
いた男はコレラ罹患の可能性ありとい  
うことで乗船を拒否され、白衣の係員に連れて  
いかれた。山崎に異常はなかった。栄光丸  
は十月四日に釜山港を出発した。

舞台は再び海上へ戻る。

引揚船の中で山崎は始終『ばらいそ』を  
読んで過ごした。他にやることもなかった。  
記事や読み物はもちろん、雑誌に掲載さ

れている広告や編集後記まで読んだ。読み  
物の著者や挿絵の画家の名前も覚えてし  
まった。

何回も読み返しているうちに、山崎は自  
分がこの雑誌の記事を書くことになつた  
ら、どんなふうを書くだろうかと想像を巡  
らせるようになった。

(俺だったら、どんな題材で記事を書くだ  
ろう)

次第に想像は、自分が『ばらいそ』のよ  
うな雑誌を創ってみたなら、というものに変  
わっていった。もし自分が出版者となつて  
雑誌を創刊したら、どういう雑誌にするだ  
ろう。

(やはり、『ばらいそ』のようなエロ・グロ  
雑誌か？ でも戦争が終わった今日にグ  
ロを読もうとする者はいないだろう。とな  
ると、やっぱりエロ一本になるか)

山崎の脳裏に浮かんだのは、上海の古書  
店で出会った老人の言葉であった。

「『ばらいそ』が案外売れるんだよ。し  
かも日本の軍人たちが買っていくんだ。店  
を開けたばかりの時間とか、もう店を閉め

ようって頃にやっ来て、この雑誌をかうとそそくさと帰っていくんだ。普段はあれだけ威張ってる日本の軍人がだよ」

ふだん牛馬のように働かされ、そして働かせられる日々に順応しているかのように見える軍人たちが、人通りの少ない時間帯にエロ雑誌を買いにやってくる。このことが、山崎には衝撃的であった。しかしよく考えれば当然のことでもある。いくら軍国主義の熱に浮かされようとも、体はヒトである。性的快楽を求めても何らおかしくない。

それだけ、エロというものが人間にとって重要な要素なのだった。

(戦争に負けた今も、きっと日本人はエロを求めるとは違いない)

しかし現時点ではまだ、ただの妄想に過ぎない。将来エロ雑誌を創刊して金を稼ごうという気は、まだこの男にはない。

十月八日、引揚船 栄光丸は舞鶴港に到着した。

遠くにうつつら舞鶴の灯が見えると、甲板に上がっていた兵士たちは歓声を上げ

た。声は船内にいた山崎の耳にも届いた。船内にいた兵士たちが歓声に誘われるように次々と甲板へ上がっていった。皆、この時を心待ちにしていたのである。

山崎も思わず『ぐるてすく』を蚕棚に置いたまま甲板へ駆けだした。

甲板は騒ぎを聞き集まった男たちでごった返し、ほとんど身動きが取れなかったが、そのうち誰かが

「灯り見たやつあ、さっさとどけよ」

と叫んだのをきっかけに船の先頭の間が移動を始めたらしく、山崎たちは少しずつ船の前の方へ押し流されていった。

山崎は遠くに蛍のように光る舞鶴の電灯を見ると、口から「あっ」と言葉を漏らした。そして深い感慨の念が首筋を通って顔を温めた。

(ようやく帰って来た。何とか生きて帰って来たんだ)

十月の薄明の頃である。

肌寒い空気が甲板を満たしていた。船室から飛び出した山崎は、元からデッキにいた者のように軍用防寒着を着ておらず、腕

にびっしり鳥肌が立っていた。しかし寒い分だけ故郷に帰れた喜びは、いっそうしみじみと浸みってくるようだった。

舞鶴。

京都北部に位置する港湾都市で、江戸時代は商港として栄えたが、明治三十四年に舞鶴鎮守府が設置されると軍港として発展を遂げた。一方でアメリカからの攻撃目標として狙われることが多く、昭和二十年頃になると軍用施設や艦船がたびたび空襲を受けた。大東亜戦争終結後は地理的便利さから引揚船の受け入れ港に指定されている。

港に船が着くと、すぐにまた検疫が行なわれた。

検査の内容は釜山のそれとほとんど同じだったが、ただひとつ異なっていたのは全身に白い粉が振りかけられたことであった。係員は乗船者に巨大な注射器のような道具で粉を噴射した。

「この粉は一体何なんです？」

山崎は鼻に粉が入って、くしゃみが止ま

らなかった。

「アメリカの薬だ。DDTと言って、虱を殺す薬だそうだ」

係員はきわめて事務的な口調で言った。山崎だけでなく他の乗船者も大きくしやみをしていた。

検疫所を通過すると、今度は引揚者配給所に並ばせられた。配給所では引揚者ひとりひとりに麦米混合の握り飯と沢庵漬、それから各々の郷里の駅まで使用できる特別切符が手渡された。握り飯の包みはほのかに温かく、握られて間もないもののようにだった。

その後書類等の簡単な手続きを済ませて、山崎は解放された。手続きが終わった頃にはすっかり日が暮れていた。灯りの点いた船舶が港に並んでいる様子は何とも壯観である。

栄光丸の兵士たちは、関西に家を持つ者を除き、このまま舞鶴で一夜を明かし、明日一番の汽車で故郷へ帰るようであった。山崎も今夜は舞鶴に泊まろうと決めた。

舞鶴市街は空襲の傷跡がまだ残ってい

た。山崎は大陸にいて、しかも前線ではなく病院勤務であったから、空襲というものを体験したことがなかった。所々に戦火で焦げ付いた壁があつて、一角に煙で燻されているような匂いが漂っていた。

山崎が宿屋を探そうと港の近くをうろついていると、後を二、三人の子どもたちが付いて歩いてきた。

（地元の子どもだな。引き揚げの兵隊がそんなに珍しいか）

わざと角をいくつも曲がつて諦めさせようとしたが、それでも子どもたちは山崎に付きまとい続けるのだった。

子どもたちは八歳くらいで、中には女兒もいたが皆半裸だった。衣服と言えるものは半ズボンだけで、それも擦り切れたり泥で汚れていたりした。山崎は直感的に、子どもたちが孤児であることを察した。上海にいた頃も、こうしたみすぼらしい身なりに子どもは見かけたことがあつた。

「握り飯が欲しいのか？」

山崎は背囊から、先ほど貰ったばかりの握り飯の包みを出して見せた。

子どもたちは待つてましたとばかりに山崎のところへ近づき、小さい背丈をつま先立ちで伸ばして、まるで鯉が餌を求めるように口をパクパクさせた。からかつてやろうと、子どもの届かない高さに握り飯を上げると、子どもはびよんびよん飛び上がりながらそれを掴もうとした。滑稽だった。そのとき、

「こらあ餓鬼ども、兵隊に纏わりつきやがつて！ 飯を食いたきやあアメ公のところにも行きやがれ、さもなくば警察に突き出すぞ」

と通りの奥から野太い声がした。振り返ると、大きな角材を持った軍服の男が走つてやつてきた。握り飯を受け取ろうとした子どもたちは彼の姿を見るなり一目散に逃げだした。通りには山崎がひとり残された。

「何するんだ、かわいそうな子どもたちじやないか」

山崎は軍服の男に言った。男はため息をつくと、子どもが走り去ったほうを振り返つた。

「あいつらは餓鬼だ。地獄の餓鬼だよ。引き揚げた兵隊たちが飯を貰っているのをわかっていて、蟻みてえにどこまでも群がって来やがる。いいかお前、一度あいつらに構ったらえらい目に遭うぞ」

「でも、握り飯たったひとつじゃないか」「けっ、観音様の真似でもしようってのかい。でも覚えとけ。お前はあいつらを孤児だと思つて情けをかけようとしているんだろうが、あいつらはあいつらで情報網を作つていやがるんだ。どこそこの通りで兵隊さんが握り飯をくれた。あと二つ持つてる。今なら間に合うぞつてな具合で、互いに情報交換しては飯にありつくために集団でかかつて来やがる。気が付けばお前の握り飯は一個も無くなつてるぜ。」

俺はこのひとつ前の船で引き揚げてきたけどよ、俺と一緒に来たやつが餓鬼どもに囲まれて滅多打ちにされてるのを見ただ。中にはアメ公からピストルをくすねて持つてるやつもいるんだ。侮っちゃならねえ。その握り飯はちゃんと背囊に仕舞つときな。宿かどっかに泊まつて、ひとりでい

るときに静かに食べる。窓は開けるなよ」男はそう言うと、山崎が歩いてきたほうに消えていった。再び、山崎は通りにひとり残された。手元に、子どもたちにあげるともりだった握り飯があつた。ぼろぼろと崩れそうになつたのを、あわてて口に入れた。

「最近の餓鬼はほんとに餓鬼なんだな」夜の舞鶴を歩きながら、今日だけはしっかりと宿に泊まつたほうが良いかもしれなと思つた。

山崎は宿で夜を明かした。宿と言っても所詮は簡易宿泊所で、畳の敷かれた大部屋に大勢の引揚兵と雑魚寝をするのだが、少し頭をもたげれば上段にぶつかる蚕棚に比べれば、天井が高いというだけでも幾分か上等であつた。

宿には栄光丸の兵士が何人もいて、やはり例の握り飯を持っていた。舞鶴で働いている日雇いの労働者や漁師などいいて、部屋には汗臭さと生臭さ、そして雑談の声で満ちていた。

山崎は腹が減っていた。昨日、船内で夕

食をとつてから何も食べていなかった。握り飯の包みを解いて、むしゃぶりついた。めしはうまかつた。既に握り飯は冷えていたが、気にせず腹の中に納めてしまった。指に付いた米粒を食べていると、隣にいた兵士が菓缶を勧めてきた。

「水です。飲みませんか」

「どうも」

山崎は菓缶を受け取ると、背囊から軍用水筒を出して水を注いだ。満たされると、直接注ぎ口に唇をつけて飲んだ。

「同い年くらいですわね」

うまそうに水を飲む山崎を眺めながら、男は言った。

「あ、そうですか？」

「僕は今年二十七になります。あなたは？」

「俺は三十二だよ」

「これは失礼しました。でも、顔は若々しいですね」

「褒められてるのか揶揄われているのかわからないなあ」

「しかし綺麗な髪の毛ですね。三十二歳でここまで髪が真っ白なのははじめて見ま



した」

山崎は自分の頭を触った。山崎の髪は引揚船に乗り込んだあたりからみるみる白くなり、舞鶴に着く頃にはすっかり白髪頭になっていた。病院での過酷な労働から解放された安堵で、髪の色が抜けたのだろうと山崎は考えていた。

「DDTかけられたらこんななっちゃった」

聞いた男は吹き出して笑った。言った山崎もつられて笑った。

「あなたも栄光丸の方ですか？」

「そうだよ。山崎耕作。おたくは？」

「僕は増永です。増永善吉です。この前まで満州のほうにいました」

「俺は上海の病院で。満州ってことは、戦闘員か？」

「ええ。鉄砲を担いで歩き回っていました。ずいぶんと骨が折れましたよ」

山崎はこの増永という男に好感を持っていることに気が付いた。物腰が柔らかく、山崎の発言にいちいちうなずくので、思わずもつと話したくなるのである。ふたりは

随分と話し込んだ。

二時間ほど話していると、宿の主が部屋にやって来て

「消灯するぞお」

と声を張った。騒がしかった部屋はすぐに静かになって、各々寝むる支度を始めた。軍用毛布を持っている者はそれにくるまつたが、山崎と増永は持っていなかったから、直に床に転がった。

「山崎さん」

「何」

「明日、一緒に汽車に乗りませんか。あなたも朝一の汽車に乗るつもりでしょう？ いや、きつとここにいる人は皆そのつもりだ。自分は実家が千葉にあるので、そこまで行きますが、山崎さんはどこまで帰りますか」

「俺は東京で降りる。浅草に家があるもんで。でもまあ、空襲があつて家も家族も焼けちゃったけどな」

「僕も妹と母親が死にました。兄は南方で戦っているようですが、どうも生きています。かわかりません。向こうじゃ糧秣が尽きて、

人間の肉まで食っているそうです。兄は哲学をやっていましたから、そこまでするくらいならいっそ食を絶つてしまおうでしょうね」

増永の口調は淡々としていて、怒りや嘆きのようなものが微塵も感じられなかった。

（きつと泣きに泣いたあとなんだろかな）

山崎は増永の気持ちは何となく理解できた。人間は散々むせび泣くと、心の中にあるもやもやとしたものがさっぱり洗浄されて、悲しみの感情が湧いてこなくなるのである。

山崎は増永と汽車に乗ることにした。翌日、ふたりはまだ空の暗い早朝の四時に東舞鶴駅に向かった。

始発を狙った引揚兵が既にちらほら見受けられたが、ふたりはまだ早いほうであった。そのうちに続々と引揚兵が駅に集まり始め、駅前には長蛇の列が出来た。ストーブもまだ焚かれていない。十月の冷たい風に曝されながら、男たちは駅が開くのを

待った。中には女の姿もあった。

やがて駅舎が解放されると、人々は雪崩のように始発の汽車に乗り込んだ。

ふたりは不幸にも席に座ることは出来ず、押し合いへし合いする満員電車の中で立ったまま関東を目指すことになった。

ふたりはまず敦賀に向かい、そこで汽車を乗り換えて米原に向かい、そこから名古屋、豊橋へ。豊橋からは東海道線に乗り、ようやく新橋に辿り着いた頃にはふたりとも長時間の乗車で足腰が疲弊してしまい、客車を降りるなりホームのベンチにへたれ込んでしまった。

その後、新橋駅前の安宿で一泊した。翌日、増永は千葉行きの電車を捕まえるべく山崎と別れた。

別れ際、ふたりは長旅を共にした礼として、互いに自分の所持品を交換することにした。

増永は一枚の写真を渡した。芸者が胸をはだけているヌード写真である。

「この写真には、何度も助けられました」増永は苦笑いした。

増永がヌード写真を出してきたので、山崎は思わず例のエロ雑誌「ばらいそ」を出しかけたが、慌てて背囊の奥に押し込んだ。いくら長旅をともしたとはいえ、これだけはどうしても他人に譲ることのできないものだった。山崎はこの雑誌を持っていると、生きる気力が湧いてくるような気がするのである。

何を渡そうかと背囊を探っていると、携帯式の飯盒が出てきた。中にはいっぱい大豆が詰められていた。山崎が釜山を旅立つ前、船の中の食料として病院の厨房からこっそりくすねてきたものであった。結局それを口にするのではなく、背囊の中で寝むっていたのである。

「これ、俺が大陸を出る前に仕舞っておいた大豆なんだけど、受け取ってくれないか。炒つてあるから長く持つはずだ」

「ありがとうございます。これは僕が飢えたときのために、大切にとっておきます。ところで、山崎さんはこの後どうされるんですか」

「どうだろうなあ。とりあえず焼けた実家

を見に行つて、それから有楽町の仕事場が焼けてないか確認しに行こうかな。俺は劇団で働いていたんだ」

「へえ、劇団で！」

「増永はどうするんだ？ 仕事先は焼けてないのか」

「どうでしょうねえ。実家が文房具屋で、そこで働いていたんですが、実は赤紙が来る前から店を閉めようか悩んでいたんです。僕、やりたいことがあって。クラシック音楽を聴くのが好きなので、いつかレコード屋を開きたいと思つて。開けたらいいなあ。でもまあ、まずはおまんまを確保するところからですかね」

「そうだな。まずは生きのびるところからだ」

こうしてふたりは別れた。駅舎に走っていく増永の背中を眺めながら山崎は、

「もう彼と会うことはないだろう。しかし、不思議な出会いもあるものだな」

と独り言ちた。

しかし、時に運命というものは奇妙なことをするものである。およそ四年後、この

増永善吉は山崎耕作のライバルとして再び姿を見せることになるのだが、そんな未来を彼は知る由もない。

その後山崎は浅草へ向かった。

東京大空襲で家族は全滅していたし、家が焼けているのも確実であった。山崎は浅草の生家に少しの希望も抱いていなかったし、燃え残った家具や思い出を彫り出しに行こうというわけでもなかった。ただぼんやりと、無残な家の姿を目に焼き付けなければならぬように感じただけであつた。

山崎の家は「浅草六区」と呼ばれた通りから少し外れた場所にあつた。

とはいえ花の浅草であることには変わりなく、家の近所には映画館やカフェがあつて、青年時代の山崎は暇があると出かけて女給をからかいに行ったものだった。

しかし浅草駅を出た時点で、既に辺りは荒涼としていた。花畑に火を点けたあとの灰だけが残っている、といった印象であつた。わずかな建物を除いて見渡す限りが廃

墟と化しており、格子状の街区の跡だけが浅草であることを物語っていた。

それでも山崎は、瓦礫の多い道を頼りに実家のあつた場所まで歩いた。

（この一角は劇場があつた。へたくそなレビューを毎日やっていた。ここはストリップの女優たちが住んでいた下宿。ここは坊主頭の安田の家……）

戦火の余燼から在りし日の風景を引っ張り出しているうちに、山崎の家があつた場所に辿り着いた。

跡形もない、とはこのことを言うのかもしれない。

家そのものはもちろん、表札から植木鉢から何から何までが燃えてしまい、山崎家であつたことを証明するものが何ひとつなかった。ただ炭化した柱が二、三本転がっているばかりである。しかし、それは間違いなく実家なのであつた。

山崎はもう涙を流さなかつた。気道に乾いた空気が通り抜けるのを感じただけであつた。

（父と母はどこで死んだのだろう。家に

いたところを爆撃されて、逃げる間もなく焼け死んだのか、それとも逃げようとしたところを炎に囲まれたのか。何もわからないな）

家の周りを見渡すと、所々に簡素なバラック小屋が立てられているのが見えた。その土地に住んでいた者なのか、それとも余所者が勝手に住み着いているのか。ちょうど昼時で、炊事の煙が細く立ち上っているところもある。

一瞬、山崎もここでバラックを建てて暮らすことを考えた。だがそれは、甘えのよう感じられた。もし再びこの場所に根を据えたら、山崎はまたもとの「諦め」の山崎に戻ってしまうに違いなかつた。『ばらいそ』と出会って、彼の姿勢は変わっている。

足元に落ちていた小枝を線香に見立て、手を合わせた。山崎は踵を返してその場を立ち去つた。冷たい空気で満ちていた気道に、熱が戻ってきたようだった。

浅草を去つた山崎は、有楽町を目指した。有楽町には出征前に働いていた劇場「浪漫

座」があるはずで、おそらくはこの場所も空襲の被害に遭っただろうが、とりあえず向かうことにしたのである。

「まったくうまくやったよな」

満員電車の中で禿げ頭の男が二人、席に座って新聞紙を開いている。

「買い出しに来た女を襲って金と服を奪った、とあるけどよ、人目につかないような場所に誘い込まなきゃならねえだろ？ おれあよ、こいつは相当な色男じゃねえかと踏んでんだ」

「きつとそうだ。それも単なる色男じゃねえ。自分が色男だとわかってる色男だろうな。たああ、おれもよ、もう少しましな顔で生まれてりゃあ、チョイトお姉さんお困りですか、なんて言いながら物陰でザクツとやれんだが」

「馬鹿言え。いくら顔が良くても禿げ頭じゃ誰も寄って来ねえよ！ しかしあれだな。事件から三か月も経つのに、まだ犯人が見つからねえとはなあ」

電車を降り、駅を出て真っ先に目にした景色は浅草とそれほど変わらなかった。爆

撃の傷跡が深く刻みつけられていた。だが焼け残っている建物は多かった。煤汚れているから火災には遭ったのだろうが、全壊・全焼は免れたのである。

山崎の胸に小さな希望が生まれた。

（これならば俺の劇場も残っているかもしれないぞ）

そして彼の希望は現実のものとなった。

劇場が残っていたのである。

劇場はコンクリートの二階建てである。そのうち一階が焼け残っていた。二階は無残にも鉄骨が剥き出しになっていたが、一階部分は山崎が最後に見た劇場の姿をそのままに残していた。

また、この劇場には地下があった。専らここは上演で使う大道具・小道具や照明器具などを保管するスペースとなっていたが、地下に関しては無傷であった。火の手が回った様子もなく、当時のポスターや指し書きがそのまま壁に貼ってあった。

（ここまで完全な状態で残っているとは思わなかったな）

ただ、そんな地下室にも変化があった。

空間を埋め尽くしていた道具や照明機材が跡形もなく消えうせ、その代わりに薄汚れた浮浪者たちが住んでいた。地下室は道具置場から、戦災で行き場をなくした人間たちの住処になっていた。

（消えた道具類はどこに行ったのだろう。疎開させたのか、それとも火事場のドサクサで持ち去られたか）

山崎は地下室のいちばん奥のスペースに腰を下ろした。昨日今日と電車を乗り継いで、足腰に相当な疲労が溜まっていた。背負いっぱなしのリュックサックを床に下ろし、壁によりかかった。

（さて、これからどうしようか。浅草を捨てて有楽町にやって来たはいいけれど、この様子だと劇場は再開することはなさそうだし、手持ちの金も少ないし、行く当てもない）

仕方なくリュックの中を広げ、中身を一通り床に並べてみた。

水筒、雑嚢、銃剣、オイル缶、替えの脚絆、防寒着、舞鶴で配られた鉄道切符と握り飯を包んでいた竹の皮、『ばらいそ第三

號』、増永善吉から貰ったヌード写真、わずかな所持金が入った財布、ゴールドデンバットひと箱、マツチ数本。

食物を得るために物を売るとしても、金目の物は銃剣くらいで、他は一文にもならない。

山崎はバットの箱から一本を口にくわえ、火を点けた。青く細い煙が立ち上り、開け放たれた地下室のドアから夕暮れの肌寒い空気がすべり込んできた。明日からの生活を想像し、山崎の目にも憂いの色が籠る。いくら『ばらいそ』から反抗の姿勢を学んでも、金がなければ何をすることもできない。

山崎が吸い殻を床に押し付けて潰そうとしたとき、地下室の入口付近から子どもが駆け寄って来た。国民学校の制服を来た丸坊主の少年で、山崎の目の前まで走ってくると、満面の笑みで

「おっちゃん、そのたばこくれよ」

と言った。

「これか？」

と山崎はバットの箱を揺らした。

「これは俺の大事な煙草なんだ。おまえみたいな餓鬼にあげるわけにはいかないな」  
こういう物乞い小僧のおそろしきは、舞鶴でさんざん教え込まれている。

「ちがうよ。いま床に捨てようとしていたやつだよ。それちようだい」

「この吸い殻が欲しいのか？　こんなもん、貰って何にするんだ。俺が吸った煙草だぞ」

「そいつを闇市に持って行けば金になるんだよ」

当時、浮浪者や浮浪児の間で吸い殻拾い、俗に「シケモク拾い」と呼ばれる仕事が盛んにおこなわれていた。煙草の吸殻を拾って中身を出し、新しい巻き紙に包んで新しい煙草に変えて売るのが、職を持たない人々にとってはシケモク拾いと廃材集め、それから靴磨きが金稼ぎの手段であった。

しかし山崎が食いついたのは吸い殻拾いではなく「闇市」という言葉であった。

「闇市？　有楽町に闇市があるのか」

「おっちゃんこの辺の人間じゃないでしょ。ラクチョウ(有楽町)に住んでるやつは

みんな闇市のこと知ってるもん。駅にある「有楽町駅に闇市があるわけないじゃないか。ついさっき駅から出てきたばかりだよ」

「おっちゃんばかだなあ。駅の中に闇市があるとも思ってるのかよ。そんなところで筵敷いてたらずぐにポリに捕まっちゃう。闇市があるのはガード下さ」

子どもは山崎の手から吸い殻を横取ると、逃げるようにして地下室を飛び出していった。

「闇市、か」

山崎は床に広げた荷物を再び背囊に入れると、劇場を出て有楽町駅へと向かった。子どもに言われた通り、ガード(道路にかかった鉄橋)へ行くと、そこには何やら人だかりが出来ていた。その中の小さな一群に近寄ってみると、群れの中心でひとりの男が声高に叫んでいた。

「ハイハイ、次はこちらでございませよ。

こちらはマチ針五本セットでございませよ。服を縫うにも雑巾を縫うにもまず針と糸でございませよ。何？　針が売っても糸が

なきやどうしようもないって？ わかっていますよ奥さん、だからね、糸も付けちゃいましょう、ハイ。こちらは正真正銘の生糸でございます。ほら見てごらんなさい、このつやですよ。日頃糸を使い慣れてる奥さん方にはわかるでしょ、素麵みたいにすうつとなってるでしょう。これで、さあ四円だよ四円。ええ四円」(注①)

(針数本とわずかな糸で四円！ とんだぼったくりじゃないか！)

山崎は思わず怒鳴って入って行こうとした。きつと露天商の周りの人間も、そう思ったに違いない。きつと群衆はさあっと散っていくだろう。

しかし、群衆はむしろ中心に寄って行った。露天商が天に掲げた針糸に、女たちは次々に手を伸ばして奪い取らんとした。

「私が買うわ」

「買った！」

「それをおくれよ」

たちまち針と糸とは商人の手を離れて、まるで手毬を奪い合う幼児のように、ぼんぼんと宙に舞う。地面にゴザを敷いて、そ

の上に尻を載せた商人の頭上に一円札が降り注ぐ。山崎はまったく理解ができなかった。

針糸売りの奥では、大鍋一杯に汁粉が煮られていた。

「椀一杯の汁粉で五円だよ五円」

ちようど小腹が空いていた。山崎は鍋の前の人の列に並んで、順番が来るまで待った。小豆の香りがガード下に漂っていた。

ようやく山崎の順番になって、椀に注がれた汁粉を飲んでみると、これがちつとも甘くなかった。汁粉というよりも、小豆をただ煮ただけの汁と言った代物だった。甘味はほとんどない。餅も入ってはいしたが、雛あられくらいのお気持ち程度のものであった。

「こんなんでも五円だなんて、ずるいじゃないか」

山崎が鍋をかき回す女主人に訴えると、後ろから山崎の肩にポンと手がかかって、振り返ると腹の出た背丈の大きい男が立っている。先ほど山崎の前に並んでいた男だった。

「そんなに汁粉が嫌いならおれが飲んでやるよ」

男は山崎の持っていた、まだ汁粉が半分残っている椀をひったくると、まるで鬼が血を飲むようにさらさらと口に流し込んでしまった。空っぽになった椀だけを返された山崎を見て、並んでいる人間たちは皆笑った。

腹が立った山崎は、さっさとガード下を抜けてしまおうと、速足で歩き出した。

通りがけにちらつと露天商たちの「宝物」を覗いていったが、どれもこれも他愛もない代物で、そのくせ値段ばかりは法外に高かった。普通価格の十倍近い値段で売られているものばかりだったが、それにも関わらず闇市の客は飛びつくようにして買っていた。その様子が山崎には異様に映ったが、同時に、こんな馬鹿げた値段に納得しなければいけないほど、日本国民の暮しや経済状態がおかしくなっているのだとも推測出来たため息が出た。

いつか、それもそう遠くない「いつか」に、自分も針糸四円也に飛びつかなければ

ならないのかもしれない。ガード下の暗がり、ふっと自分の目の前に現れたような気がした。

その日から、山崎は劇場地下を住み家にすることにした。とりあえず、しばらくはここを拠点に金を稼ぎながら生活し、ゆくゆくはそれを元手に事業でも始めようと大まかな計画を立てたのである。

しかし問題は、金を稼ぐ手段がないことであつた。金がないということは、物を買うことができないということである。地下での暮らしは寝泊まりに金がかからないが、飯代は必要になる。役所で決められた住居を持たない浮浪者同然の身分である山崎は配給の食料を手に入れることができなかつた。となると、闇ルートに頼らなければならぬ。そしてそのためには金が必要。

最初のうちは軍隊の装備品を闇屋で売って金にしていたが、銃剣、脚絆、オイル缶等売ってしまうともう品物がなくなつてしまつた。手にした金は一週間もすればすぐに消えてしまつた。

金を稼ぐ手段がなくなつた。

山崎は、以前吸い殻を求めてきた子どものことを思い出した。

（たしか吸い殻を集めて闇屋に持って行けば金がもらえると書いていたな。いい大人のおくせにシケモク拾いをして金を稼ぐのは恥ずかしいが、所持金が底を尽いた今、背に腹は代えられないな）

この劇場地下の住人たちは、皆煙草をよく吸つた。いったいどこから仕入れてくるのかは不明だが、老いも若きもよく吸う。そしてその吸い殻を狙うシケモク拾いの子どもたちが頻繁に劇場に出入りしていた。

あるとき山崎は、子どものひとりに声をかけた。以前、吸い殻をねだつてきた少年である。

「吸い殻拾いは大変か」

少年は、急に何を訊くのかといった表情でぼかんとした。

「吸い殻拾いは金になるか？」

「……なるけど、大した金にはならないよ」

「飯が食えるくらい稼げるか？」

「うまくやればね。でも素人にや無理だよ。おれみたいに手慣れてないと、とてもじゃないけど食つてけないね」

「もし俺が、吸い殻拾いを教えてくれと言つたらどうする」

「おっちゃんに、おれが？ ええ、やだなあ。だつてシケモク拾いはやるやつが多いほど稼ぎが悪くなるんだ。昔は自由に拾つて回つてたけど、最近はシケモク拾い始めるやつが増えてけんかが起きるから、みんなだナワバリ決めて拾うことにしてんだ。もしおっちゃんもシケモク拾いをやったら、ナワバリがもつとせまくなるだろう？」

山崎は、そこをどうか、と懇願した。頭を下げた。戦時中ならば、一軍人が少国民に頭を下げるというのは屈辱以外の何者でもなかつたが、劇場の床に頭をつけて頼んだ。

少年もまさか目の前の男が自分に頭を下げるとは思わなかつたのだろう。慌てて顔を上げさせ

「わかつた、わかつたよ。教えてやるよ。シケモク拾いのやり方、教えてやる。おれ

の弟子ってことにするからさ。その代わり、弟子入り願いのブツをよこしな。ただで弟子入りできると思ったら大間違いだぜ」

(なんだよ。こつちが恥を忍んで弟子入りを懇願してるとのに、ブツを寄越せだつと)

思わず口から出かけた言葉を飲みこんで、山崎は少年にあげられるような物がなにか探した。リュックサックの中をがさがさとやっていると、ぼろつと何かがこぼれた。

「なんだそれ」

山崎は少年の手を払い、あわててそれをリュックの中に戻した。増永から貰ったヌード写真だったのだ。

「いや、これは俺の母親の写真だ。死んだ母親の形見なんだ。いくら弟子入りだからといって、これをやるわけにはいかない」

嘘である。この写真には増永との道連れの旅の記憶が詰まっているような気がして、手放したくなかったというのが本音だった。

しかし少年は見ていた。

「うそだあ、おっぱい丸出しの母ちゃんの写真を持つてるやつがあるかよ。見せてみる」

無理やりリュックサックに手を突っ込まれ、止める間もなくヌード写真を奪われてしまった。そういえば以前吸い殻をねだられたときも、この餓鬼はひったくるようにして吸い殻を持ち去ったな、と山崎は思った。

少年はまじまじと写真を眺めてから

「こいつをくれるっていうなら、弟子入りさせてやってもいいぜ？」

「そいつはあげられない。俺の友達から貰った大事な物なんだ」

「じゃあ教えてやらないね。べつに、おっちゃんにシケモク拾いを教えたって、おれの稼ぎが増えるわけじゃないもん」

そう言われると山崎は困ってしまった。渡すべきか渡さぬべきか。その間で山崎の心は揺れたが、ここで写真を渡さなければ明日の飯にありつけない身であることを考えると、最早友情にしがみついているわけにもいかなかった。

山崎はヌード写真を少年に渡した。

少年は嬉しそうに写真をポケットに仕舞うと、

「じゃあ、約束通り教えてやる」

と言って、彼が日頃シケモク拾いに回っている縄張りの一部を紹介された。いつでもそこは有楽町駅であった。

「この改札の近くをおっちゃんにやるよ。ここでだったら好きにシケモクを拾っていいけど、他の場所でやったら許さねえからな。あくまでおっちゃんはおれの弟子ってことを忘れるなよ」

その後山崎は少年から吸い殻の拾い方を教わった。少年曰く、シケモク拾いというのは如何に人間を観察できるかというところに核があり、煙草を吸っている人間を瞬間に見分けて吸い殻を地面に落とす瞬間を拾うのだという。あくまで自然に、そして素早く。

少年は山崎に実演をしてみせた。少年は改札を出て来る無数の人の群れをくぐりぬけるようにして進み、実に素早くシケモクを拾い集めた。たちまち十の吸い殻が集



まった。師匠にふさわしい手際の良さである。

翌日から山崎は吸い殻拾いを始めた。

有楽町駅は人の往来が多く、山崎の縄張りである改札付近は特に混雑していた。その中で誰かが吸った煙草を見つけてるのは至難の業であった。ようやく切符売り場でぼいと煙草を捨てた人を見つけて近寄り、すぐに煙草は靴で踏みじられてしまうのである。

「どうしてそんなことをするんだ！」

山崎が煙草の主に怒鳴ると、「何が？」と首を傾けた。

初日の成果はひどいものだった。日が暮れるまでシケモク拾いをしたが、拾えたのはたったの一本分だった。終電後にシケモクが散らばっていないか見に行ったが、ほとんどが雑踏で踏みつぶされ、まったく商品にならない。

翌日も状況は同じであった。

三日目になると、目が慣れてきて、誰かが煙草を捨てたのを見つけてくれるようになった。人の流れに逆らわないよう

にしゃがむ技術もついてきた。

三日目、八本分。四日目、十三本分。五

日目、二十六本分。

拾ったシケモクの本数は次第に増えていった。シケモク拾いに楽しさを感じるようになったのもこの頃である。

拾ったシケモクは劇場地下に持ち帰り、中身の葉を出し、あらかじめ業者から手に入れておいた新しい紙に巻き直して、闇屋に売った。幸いにも当時は極端に煙草の闇価格が跳ね上がっていたから、シケモク拾いでもいい稼ぎになったのである。

気がつけば十一月になっていた。既に三週間に劇場地下で過ごしたことになる。気温も下がり、夜には防寒着を出さなければとても寝ることができなかった。

この頃になると山崎の吸い殻拾いはかなり上達しており、自身もこの仕事に楽しさを感じるようになっていた。「好きこそもの上手」という言葉があるが、まさにこの通りで、ますます腕が良くなっていく。ある日、山崎は有楽町駅である少年と再会を果たしたが、少年は

「おっちゃん、シケモク拾ってるのを見てたけど、うまくなったな。なんかこう、動きがすばしくなって、むだがないや」

と山崎の働きを褒めた。山崎は相手の子どもであることを忘れ、

「ありがとうございます」

と頭を下げた。

だが、シケモク拾いが軌道に乗ったことは山崎にとって必ずしも良いことばかりではなかった。あの「諦め」が再び山崎の心に巣喰い始めたのである。

もともと山崎がシケモク拾いを始めた理由は、あくまで今後のための資金づくりで、いつか事業を始めることが彼の目標のはずであった。だが、いざシケモク拾いで金を稼ぐことができるようになると、その楽しさに夢中になっていったのである。

もちろん、当初の目標を山崎が忘れていくわけではない。夜中、シケモクの中身を掘り出す仕事を終えて寝むりにつこうとするとき、いつか事業を始めなければならぬと思いはするのだが、

(だけれどシケモク拾いで十分に金を稼

げるからなあ)

という考えがそれを覆い隠してしまうのである。

この話とは関係がないかもしれないが、引揚船の中では穴が開くほど読んでいた『ぼらいそ』を、このごろは表紙をめくりもしなくなっていた。『ぼらいそ』は山崎のリユックサクの中で転がっていた。

今から書く内容は、一見物語の筋と関係がないように見えるかもしれないが、のちのちの展開に必要なことなので記しておく。

その日も山崎はいつものように有楽町駅でシケモク拾いをし、日が暮れたので劇場に帰ろうとしたところ、雨が降り始めた。勢いの強い雨で、駅のトタン屋根を殴打するようであった。

改札を出たばかりの人々は、傘をさして出ていく者、傘を持たずに屋根の下に留まる者、傘は持たないが覚悟を決めて飛び出していく者に分かれた。駅の中は雨宿りの人間と改札を出る人間とでたちまちごっ

た返し、怒号が飛び交った。

傘がない山崎は留まる者であった。煙草は雨に弱い。この豪雨に打たれば、たちまちびしょ濡れになって風味が悪くなり、売り物にならなくなる。山崎はシケモクの入った袋を片手に、雨が止むのを待っていた。

しばらく待った。夜が歩いている。

雨脚はだいぶ弱くなり、駅舎の中で雨宿りをしていた人間も次々に去っていった。駅にいるのは山崎を含め十数人になっていた。

山崎は切符売り場の近くの壁に少女がもたれているのに気がついた。女学校の生徒なのか、制服姿で手帖を開いて何かを書いていた。遠目で見ても、整ったうつくしい顔をしていた。  
(野の花のようだ)

と山崎は柄にもない詩的な言葉を想像した。どうしてかはわからないが、惹かれるのである。山崎は雨がだんだんと細くなっていることにも気付かず、ただぼうつと少女のほうを眺めていた。

少女が手帖を閉じた。顔をあげたところを、少女のほうを眺めていた山崎と目が合った。山崎が慌てて目を逸らそうとすると、少女は彼に向かって小さく手を振った。  
(優しそうな顔をしているな)

山崎は手を振り返そうと、ポケットの中に入れていた右手を抜いた。そのとき、山崎の後ろから背の高い男が現れて少女に向かって走って行った。男は茶髪で、見るからに日本人ではなかった。

「ハロー、ジョージ！」

少女は男と熱い抱擁を交わし、それから人目をはばからずに唇を重ねた。山崎は出した右手をポケットの中に戻した。少女と外国人はひとつの傘で雨の中を出て行った。

その夜、山崎は劇場地下の浮浪者からこんな話を聞いた。

この頃、「パンパンガール」というのが街に現れて話題になっていたので、どうしてパンパンガールとは街娼のことで、どうして「パンパンガール」と呼ばれているのかはわからない。街娼を呼ぶ合図として手を

叩くからだとか、食べ物のパンから来ているとか、色々言われているそうである。街娼と言っても、相手にするのは専らアメリカ兵で、アメリカ人好みの濃い化粧を施しているのだという。

「最近はラクチヨウ(有楽町)にもパンパンが増えてきてさ。あっちこちでブチュー、ブチューしてもう、敵わんよ」

山崎は話を聞きながら、今日駅で会ったあの少女もパンパンガールなのだろうかと思った。外国人とキスをしている様子はいかにもパンパンガールだったが、山崎は彼女が街娼だとはどうしても信じたくなかった。彼女は化粧も薄く、今も学校に通っていきそうな純粋な少女のように見えたのだ。そんな彼女が、アメリカ兵に体を売っているのだとは。

(きつとあれだ。お金がなくて身寄がないところを優しいアメリカ人に助けてもらって、学校帰りのところを迎えに来てもらっていたんだ。キスは……キスは、アメリカの習慣なんだろう)

そんなことを考えた。あくまで妄想であ

る。

十二月。

この頃の出来事といえば、GHQが九月に指名した「戦犯」の逮捕が始まった。平沼元首相、広田元首相をはじめ、軍部、政府関係者、政財界の要人の手に次々と手錠がかけられた。

しかし、新聞を読まない山崎はそういう世の中の動乱をほとんど知らなかった。それどころか、今が十二月何日なのかも把握していなかった。吸い殻を拾う毎日に、暦はいらないのである。

ある日、山崎は劇場地下で寝むっているところを何者かに揺り起こされた。「ちよつとちよつと、起きなさい」

重たいまぶたを開けると、二人の警官が山崎を見下ろしていた。

寝起きの上手く働かない頭で、(あれ、俺ってポリ公に捕まるようなことしたっけか)

と考えた。真っ先にシケモク拾いのことが思い浮かんだ。

噂で聞いたところによると、シケモク拾いをしていた孤児の数人が警察に捕まり、孤児院送りにされているのだという。シケモク拾いをしていたのを咎められたのか、それとも彼らが孤児だったことが悪かったのかは不明であった。

(もし俺がお縄になったら、孤児院に送られるのかなあ。俺もう三十二歳だけど) 警官はぼうつとした表情の山崎を見て、「仕方がないなあ」とため息をつきそうな表情をした。

「あのね、もうすぐこの劇場、取り壊されるから。だから君たちがいつまでもここにいと、困るわけ。明日には解体の業者が来るから、なるだけすぐに出て行ってもらえないかな」

妙に間延びした声だった。付き添いの警官も続いて

「そうなんですすよねえ」  
と作ったような笑顔を見せる。

「今日すぐにですか」  
「そう。できれば今日中にね」

「今日中って言われてもねえ、行くあてが

ないもので俺」

「そんなの見ればわかるよ。君、何か犯罪やってないの。盗みとか、殺しとか。もし何かやってるっていうなら、すぐにでも住むところ紹介してあげられるよ。鉄格子があるから盗みに入られる心配もなし。一日三食保証。夏は暑くて冬は寒い。もしかしたら首に縄をかけられるかもしれないけどね。でもまあ、どんなところも住めば都だ」

「警官さん、おもしろいこと言うね。コメディアンになれるよ」

辺りを見ると、同じ劇場地下の住人たちは荷物をまとめて退去する準備をしていた。そして入口には警官がひとり立っていて、浮浪者たちが立ち退くのを監視している。

山崎もすぐに荷物をまとめた。昨日こさえた煙草をまとめて袋に詰め、リュックサックを背負って劇場を後にした。入口の警官が

「はい、ごくろうさん」

と声をかけた。

東京にも冬が訪れていた。

防寒着を羽織った山崎は後ろを振り返った。十月に来たときと変わらない劇場が突っ立っていた。しかし劇場の周りには少しづつ新しい建物が現れ始めていた。少しづつ復興に向かう有楽町で、劇場と、それから山崎だけが取り残されているようであった。

こうして山崎は住み慣れた劇場を追い出されたわけだが、彼には行く当てがない。また新しい寝泊まりの場所を見つけないればならない。劇場付近にどこか寝泊まりできる場所はないかと探したが、雨風凌げる場所は少なく、ようやく見つけた防空壕の中には既に先客がいた。  
(こうなったらガード下で適当な場所を見つけて寝るしかないか)  
ぐうっと腹が鳴った。

少し腹ごしらえをしようと、山崎は駅前の通りを歩いた。財布にはシケモクで稼いだわずかばかりの金があった。劇場追い出され祝いで、うどんや蕎麦を食べるものもいかもしれない、などと考えていると、道

の先から男が大八車を引いて来た。

ずいぶんと荷物を積んでいて、男が歩くたびにぐらぐらと揺れている。男は細身で見るからに力がなく、坂道でもないのに何度も立ち止まっては額の汗をぬぐっていた。

(あれだけの荷物を、ご苦労なことだね。『ドン・キホーテ』のロシナンテみたいだ)  
大八車と山崎はすれ違った。そのとき、彼は大八車の車輪が外側を向いているのを見逃さなかった。

「あつ、まづい」

そう呟いたのも束の間、大きな音とともに大八車の車輪が外れた。バランスを失った大八車は大きく傾き、積まれていた荷物が車道に投げ出された。車を牽いていた男も転倒した。

「大丈夫か!」

山崎は大八車に駆け寄り、倒れた男を起こすと、車道にこrogった荷物を歩道に戻した。荷物は木箱で、相当な重さがあった。何が入っているのか気になったが、まずは荷物を安全な場所に運ぶのが先であった。

山崎と男は時間をかけて荷物を戻した。幸いにも台車の車輪に破損はなく、嵌め直すだけで良かった。

「本当にありがとうございます。助かりました」

男は地面に落ちて汚れた眼鏡をシャツで拭いた。レンズの分厚い丸眼鏡で、どこの学者のような顔をしている。四肢が細く、背丈も小さかった。よくこの体格で大八車を引いてきたものだと言山崎は感心すらした。

「怪我はないか」

「ああ、はい。転んだときに少し膝っ小僧を擦り剥いたくらいです。これくらいの傷なら、子どもの頃に何回もこさえましたから」

「大事なならよかった。それでは、俺はこれで」

山崎が場を去ろうとする

「待ってください！ 助けていただいたお礼をまだしてません」

「お礼だなんて。そんな大したことしてないのに」

「いえいえ、大したことですよ。もし通りかかったのがあなたではなくて、こそ泥だったら大変なことでした。この荷物を失ったら僕はもう生きて行けないのです。大げさなことを言っているのでは決してありません。本当に大切な荷物なのです」

「となると、その木箱の中身は闇屋に売る物か何かで？」

「いいえ、もつと価値のあるものです。この中には紙が入っているのです」

「はあ、紙？」

「こんな場所で立ち話をするのもなんですから、どこか店に入りましょう。本当はこの荷物のことは他人に話すべきではないのですが、あなたは恩人ですし、見たところ、私の敵ではなさそうですから」

「見たところ」、というのは山崎の身なりが粗末なことを言っているのであろう。彼の服装は引き揚げたときから変わらぬ旧日本軍の服装のままであった。

二人は近くの食堂に入った。

こじんまりとしているが古い店のようで、空襲でも焼けなかったものらしい。男

は焼き魚の定食を、山崎は男の厚意できつねうどんを注文した。

「あ、申し遅れました。僕は川上一（かわかみはじめ）といいます」

「山崎耕作です」

「山崎さんはあれですか、引き揚げて来られたばかりですか」

「いや、三か月前に朝鮮から引き揚げてきたんだけど、金がなくて、この辺でシケモク拾いをして生き永らえていたって感じ」

「おお、大陸の兵隊さんですか。あつちは大変だったそうですね。僕はというと徴兵検査の日に風邪を引きまして、そしたら医者か肺浸潤だなんて言うもんですから、それで戦地には行かなかったんです。結局肺浸潤っていうのは誤診で、すぐに治ったんですけどね。戦時中は出版関係の仕事をしていました」

「じゃあ、あの大八車の紙も出版の仕事で使うと？」

「そのつもりでいます。ただ、前までいた職場で使うのではありません。この紙は、僕は九月まで大日本産業報国会(注②)と

いうところで機関誌の編集をしていました、機関誌発行のための印刷用紙二百連(二十万枚)を注文していたんですが、使う前に産報が解散しちゃって。この紙は産報の倉庫に仕舞ってあったんですが、今度建物ごと壊してしまおうそうで、だったら倉庫が潰される前にこの紙を横取りしてやろうと思ひ、大八車で運び出していたんです」「へえ、なかなか大胆不敵なことを」

食堂の女将が定食とうどんを運んできた。二人は雑談を中断し、一心不乱に飯を口に運んだ。とくに、ずっと闇の粗末な食物を食べてきた山崎にとって、久しぶりに食べるうどんの味は格別のものであった。食べ終わると、川上は眼鏡の曇りを拭きながら

「最近流通する紙が粗末なものばかりでいけません」

と嘆いた。

「仙花紙(注③)っていうのが出回っているそうで」

「そうです！ よくご存じですね」

「シケモク拾いの関係で闇屋と仲が良か

ったもんで、そういう話はよく聞くんだ」

「あれはひどい紙です。すぐだめになってしまう。でも今は物資不足でちゃんとした紙がほとんど流通してないので、結局仙花紙を使わざるをえないのです。だけど、あの紙は違いますよ。高品質の印刷紙ですから」

「でも、あの紙は何に使うつもりなのさ」  
川上は店の外に停めた大八車をいとしそうに見つめた。

「そうですね……。僕は今まで、ずっと政府機関の下っ端として働いてきたので、戦争が終わった今は自分のやりたいことをしたいと思っていたんです。僕の夢は、本を出版することです。なんというか、世の中を変えるようなすごい本を作りたいって言う人のお手伝いをしたくて。僕は文才がないので、あくまで編集とか出版関係での仕事になると思います。でも、そんな大志を抱いた人に巡り合うのがまだ一苦労で。せっかくこんな良い紙が手に入ったんだから……」

山崎は川上のことが羨ましかった。

こんな焼け野原の中でも夢を持っていて、それを叶えるためには重い大八車をも引っ張ろうとする彼が輝いて見えた。

(それに比べて俺はどうだ。毎日シケモクを拾ってあぶく銭を集めるばかりで、今日に至っては住む場所を追い出されて先の見通しもつかないでいる)

「川上さん、あんたが羨ましいよ。そうやって先のことを考えて行動しているのが、羨ましい。俺なんて日本に帰って来てからずっと吸い殻ばかり拾って、だからだら過ごしているだけさ。まあ、だからといって何かやりたいことがあるわけでもないから、どうしようもないんだけどね。はは、何したいんだろ、俺」

「山崎さん。これは僕の上司が言っていたことなんです。夢っていうのは太陽のようにならなくても自分の見えるところにあるわけではなくて、草むらの中とか、木の陰みたくない、身近だけど気付きにくい場所に隠れているのだそうです。たとえば、本棚があるとしますよ。これまではとくに意識せずに本を買ったり読んだりしていたけど、

あるときふと、本棚の中で画集が占める割合が高いことに気付く。『あれ、もしかして自分は画家になりたいんじゃないか?』とそのとき初めて気付く。夢ってそういうものらしいです。山崎さんも一回自分の身の周りを探してみたら、何か自分のやりたいことが見つかるかもしれませぬよ」

「身の回り、ねえ。身の周りって言ったって、自分の家は焼けちゃったし、戦前の仕事場も取り壊されちゃうし、持っているものといえば、軍隊にいたときから使っているこのリュックサックくらいだ」

山崎はなんとなくリュックサックを開けてみたが、中はやはり使い古された装備品ばかりで、夢や希望のようなものが隠れている気配は微塵もなかった。

ため息をつき苦笑いしていると、底の部分に紙の感触を覚えた。何かと思いきうと引っ張り出してみると、それは長らく読んでいなかった『ばらいそ第三號』であった。

「なんです、それ」

まったく忘れていたものが不意に姿を現わしたのである。山崎が表紙をめくると、ああ、引揚船の中で何度も読み返し、もはや文章を暗記するまでに至ったあの内容である。ページはすっかり黄ばみ、破れている箇所もあったが、他の兵士に見つからぬよう病院の便所や蚕棚の中で読んだ記憶は鮮明に蘇ってきた。

川上が隣にいることも忘れ、夢中になってページを繰った。ぼろっと紙片がこぼれた。

——『ばらいそ第三號』死亡御通知

そして、紙片の最後には

——喪主 ばらいそ社代表 南原梅雨

(そういえば、俺は船の上で自分が彼だったらどんな雑誌を創るだろうか、なんて想像していたなあ)

そのとき、まるで天啓のようにひとつの考えが山崎の頭に降ってきた。

(自分はエロ雑誌を創刊したいのかもしれない)

山崎は自分の発見に体が震えた。山崎にとって「本棚の画集」はリュックサックの

中で眠っていた『ばらいそ』だったのである。

「川上さん、俺、エロ雑誌をやりたい。わかったぞ。俺はこの『ばらいそ』みたいなエロ雑誌を創って見たかったんだ。どうして今まで気付かなかったんだろう。川上さん、俺はこの南原梅雨みたいに堂々とエロをやってみたいんだ。時代とか、世相とか、そういうのにも動じないような、エロ雑誌を創ってみたいんです」

山崎は川上に雑誌を広げて見せた。ページを握る手がぶるぶると揺れていた。まったく事情を知らない川上ですら、目の前の薄汚い男が何かを掴んだことを悟って笑みがこぼれた。

「やっぱりそうでしょう? 夢って身近にあるものなんです。と、ところでその雑誌を少し拝見してもいいですか?」

川上は山崎から雑誌を受け取ると、雑誌の裏表紙をめくった。

「ばらいそ社、それから文藝興行社の南原梅雨。間違いありません、これはあの『ばらいそ』ですよ!」

「『ばらいそ』、知ってるのか」

「はい、もちろんです。出版関係者の間では有名な雑誌ですよ。戦前に何度も発禁処分を食らいながらも、まるで雑草のように蘇ってくるような有名だったそうです。そしてこの雑誌を創刊した南原梅雨という男は、古今東西の猥文を調べ上げて出版しては発禁処分になり、それでも懲りずに新しい書籍を世に送り出した、通称『天下の猥出版狂』。エロ・グロ・ナンセンス時代の寵児です」

川上の声が段々と大きくなるので食堂の客の視線が川上と山崎に注がれる。山崎は人差し指を口の前に持っていった。川上は恥ずかしそうに眼鏡のレンズを拭いた。かけ直すと川上の目はいつそう大きく見えた。

「それで山崎さん、あなたはその南原梅雨になりたいんですか。『ばらいそ』に匹敵するようなエロ雑誌を創ってみたい、と言うことですか」

あの虚弱そうな川上が突然目の色を変えて身を乗り出してきたので、山崎は驚い

たが、すぐに

「うん」

とうなずいた。山崎の首筋にさあつと鳥肌が立った。自分は何か大きな決断をしようとしているのだと山崎は思った。

川上は眼鏡を押し上げて山崎の手を握った。

「わかりました。山崎さんがその気なら、あの印刷用紙をあなたの夢のために差し上げます。それから、僕もあなたの夢に乗せてください」

「本気ですか」

「本気です」

川上の目は、山崎の目を射通してちっとも揺るがなかった。

（この男は、決してその場限りの言葉を並べているわけではなさそうだ）

川上は、本気で自分の人生を山崎に賭けていた。

そして山崎も、決断を迫られていた。

山崎は生れてから三十二年間、自分で自分の人生を動かしたことがない。劇場で働くようになったのも父親のつてを利用し

たからであり、上海に渡ったのも赤紙が来たからであった。すべて外側からの動きによるものである。

山崎は唾を飲みこんだ。喉のすぐそこまで言葉が出かかっていた。口を開けばすぐにでも飛び出すだろう。ただ、すんでのところで何かが立ちふさがっていた。

（もしこれで失敗したら、損をするのは俺一人じゃない。川上の人生も、夢も失われてしまうんだ）

だが、こうも思う。

ここで決断しなければ、自分の人生はこれから一步も動かない。また元のシケモク拾いに戻るだろう。それでいいのか、山崎耕作！

「川上さん、俺の夢を手伝ってくれますか」

川上は力強く、

「もちろんです。創りましょう、新しいエロ雑誌を」

と手を握った。

「山崎さん、こう言うと胡散臭いかもしれませんが、リュックサックから出した『ばらいそ』を見ているときのあなたの目は信



頼できると思ったんです。あれは子どもの目でした。子どもが素敵な何かを見て心を躍らせているときの目です。僕はあの目を信じます。あの目をしている人間の言葉は信頼できます。僕はあなたとどこまでも行きます。たとえお上に咎められて、手鎖をすることになったとしてもです」

「わかった。俺は南原梅雨になる。だから川上さんも、俺を助けてください。俺は何も知らない人間です。俺にできないことは、あなたに任せます。創りましょう、エロ雑誌」

こうして二人は店を出た。十二月のやわらかな日差しが注いで、おもてはほのかに暖かかった。

「この大八車はどこへ運ぶのさ」

「もう少し行くと、僕が住んでいるアパートがあります。そこまで運ぶつもりです」

「わかった。ここからは俺が大八車を引く張るから、川上さんは後ろから押してくれ。これでも元日本兵だ、力は多少ある。まあ、徴兵検査は第二乙種だけだ」

「僕なんか検査すら受けていないんです

よ？」

「ははは、そりゃ大変だ！」

二人は笑いながら歩き始めた。山崎が大八車を引き、川上は後ろから押す。進む速度は牛歩ほどだったが、確かに車輪は回っている。

駅前の人通りも増えていた。二人は混雑の中を、ゆっくりゆっくり進んでいく。

続

【注釈】  
「四円」  
一九四五年当時の一円は、現代の貨幣価値に換算すると約一五八円。

「大日本産業報国会」  
労働者を戦争協力に動員することを目的として設けられた産業報国会の中央組織。通称「産報」。一九四〇年に第二次近衛文麿内閣が創設し、勤労秩序確立運動や勤労総動員運動、生産力増強運動などを指導した。

「仙花紙」

紙の一種。主に戦後に製造され、耐久性が弱く雑印刷などに用いられていた。終戦後は物資不足のため、多くの雑誌が仙花紙を用いて印刷された。